

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第29号 (2006年10月1日発行)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001932">https://doi.org/10.15084/00001932</a>

# 国語研の窓

29号

平成18年10月1日 第29号 発行 独立行政法人国立国語研究所  
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所管理部総務課  
普及広報担当グループ

〒190-8561 東京都立川市緑町3591-2

電話 042-540-4300 FAX 042-540-4334

URL <http://www.kokken.go.jp/>



研究所前庭にある 青木野枝 作「空池-II」

## もくじ

- 暮らしに生きることば 1
- 研究室から：『方言文法全国地図』の30年 2
- 刊行物紹介：『世界の言語テスト』 4
- 解説：敬語使用と敬語意識の変遷 5
- コラム：読み手に直接、語りかけてもいいですか？ 6
- ことば Q&A 7
- お知らせ：公開研究発表会 8
- 新刊 8

## 暮らしに 生きる ことば

### 「立派の人」「普通な人」

表題の言葉を見て、多くの方は“何か変な言い方だな”と感じたのではないのでしょうか。ほとんどの人が「立派の人」という言い方はおかしく、「立派な人」とするべきだと思ったことと思います。一方、「普通な人」は、これでいいという人と「普通の人」とするべきだという人がいると思います。場合によって使い分けるといふ人もいるかもしれません。

実は時代をさかのぼると「立派の人」という言い方は間違った言い方ではありませんでした。国語研究所が作成した『太陽コーパス』は明治・大正時代の雑誌の言葉を調べることができるデータですが、これによれば「立派な～」という言い方が444件あるのに対し、「立派の～」という言い方も22件あります。なかでも古い時代ほど「立派の～」の方が多く使われていて、時代とともにこの言い方が使われなくなっていったことがわかります。「普通」の方はどうかというと、「普通な～」は4件、「普通の～」は554件でした。

では現代語ではどうでしょうか。「立派の」はもう使われないので、「普通な」と「普通の」について割合を調べてみました。新聞のデータベースを検索すると、新聞では改まった言葉遣いがされるせいか「普通な」はほとんど使われず、およそ1:500の比率で「普通の」のほうが多く見られます。インターネットの検索サイトでは、およそ1:15でやはり「普通の」のほうが多いのですが、新聞よりは「普通な」もずっと多く見られるようです。

どうやら、「普通の」という言い方に対して「普通な」という言い方が増えてきているようです。かつて「立派な」が増えて「立派の」が使われなくなったときと同じようなことが起きるのでしょうか。

雑誌や書籍などの他の媒体ではどう使われているのか、気になるところです。現在のところ、多くの資料をバランスよく調べることができるデータがないのですが、国語研究所ではKOTONOHAという言語コーパス整備計画を進めています。これが完成すれば、こうした移りゆく言葉の実態を的確に捉えることが可能になるはずです。（小木曾 智信）

\*コーパスとは、言語研究用に作られたデータベースのことです。

## 『方言文法全国地図』の30年

### 『方言文法全国地図』とは

1976年の計画開始から30年。このほど、2006年3月に『方言文法全国地図』全6巻が完成しました。

『方言文法全国地図』は、方言の文法に関する全国的な分布を明らかにすることを目的とする方言地図集です。全国807地点を対象とし、合計350枚の地図から構成されています。

国立国語研究所は、設立当初から、日本語の方言を様々な方法で研究してきました。中でも大きな仕事として知られるのは、1974年に完成した『日本語地図』全6巻です。この300枚からなる地図集の刊行が日本の方言研究界に与えた影響は多大で、方言分布の研究レベルを大きく引き上げることになりました。一方で、『日本語地図』は、おもに「つらら」「かたつむり」のような語彙を対象とした地図集であったところから、文法に関することがらの分布を明らかにすることが期待されました。

それを受けて、文法事項の調査計画が立てられ、1977年に準備調査、1979年から1982年に本調査を実施しました。調査終了後、『方言文法全国地図』第1集が1989年に刊行、以後、17年の歳月をかけて、完結に至ったものです。

### 方言地図としての特徴

『方言文法全国地図』の特徴は、徹底した資料地図という点です。

一般に、方言の分布を表す方言地図は、作図者の意図を強く出した解釈地図と、データの提示に重点を置いた資料地図とに分けられます。『方言文法全国地図』は、後者に分類されるものです。しかし、編集者自身が言うのも変ですが、『方言文法全国地図』は、並の資料地図ではなく、一律の基準で資料を提示する方針を貫き通した、筋金入りの資料地図です。

方言地図の作成においては、以下の3段階が基盤となる編集作業です。

調査データから地図に掲載する語形の採否を決めるのが第1段階です。資料地図だからと言って、何でも地図に挙げるわけではありません。この点、誤解されることが少なくないので、留意いただきたいところです。それぞれの地図のねらいにおさまる回

答の範囲を決めるのが、この作業です。

採用する語形が決まったら、一定の手順で語形をまとめていきます。これが第2段階の作業で、「語形の統合」と呼んでいます。この手順は、基本的に地図集全体を通して、共通しています。この作業で、対象とする項目において、地図上に挙げるすべての語形がリスト化されることとなります。

語形の統合により整理された各語形に地図の記号を与えます。これが第3段階です。『方言文法全国地図』では、類似した語形には類似した記号を与えることを基本方針としています。

以上の作業手順のほぼすべてを、地図に付録する解説書に記載しています。同時に解説書には、調査時に得られた回答データ（原資料）も「資料一覧」として、収録しています。

つまり、調査の原資料、そこからの必要なデータの選択、選択したデータの整理手順、整理したデータの記号化方法、以上のすべてを公表しているわけです。ここまで手の内を明かしている方言地図は、世界中どこにもないと思います。このような方法をとったのは、地図化の結果に追試可能な性格を持たせたからにほかなりません。つまり、科学的手法で方言地図を作成するための必然性なのです。さらに、後で述べるように、原資料と整理済みのデータは、電算化した形での公開も行っています。

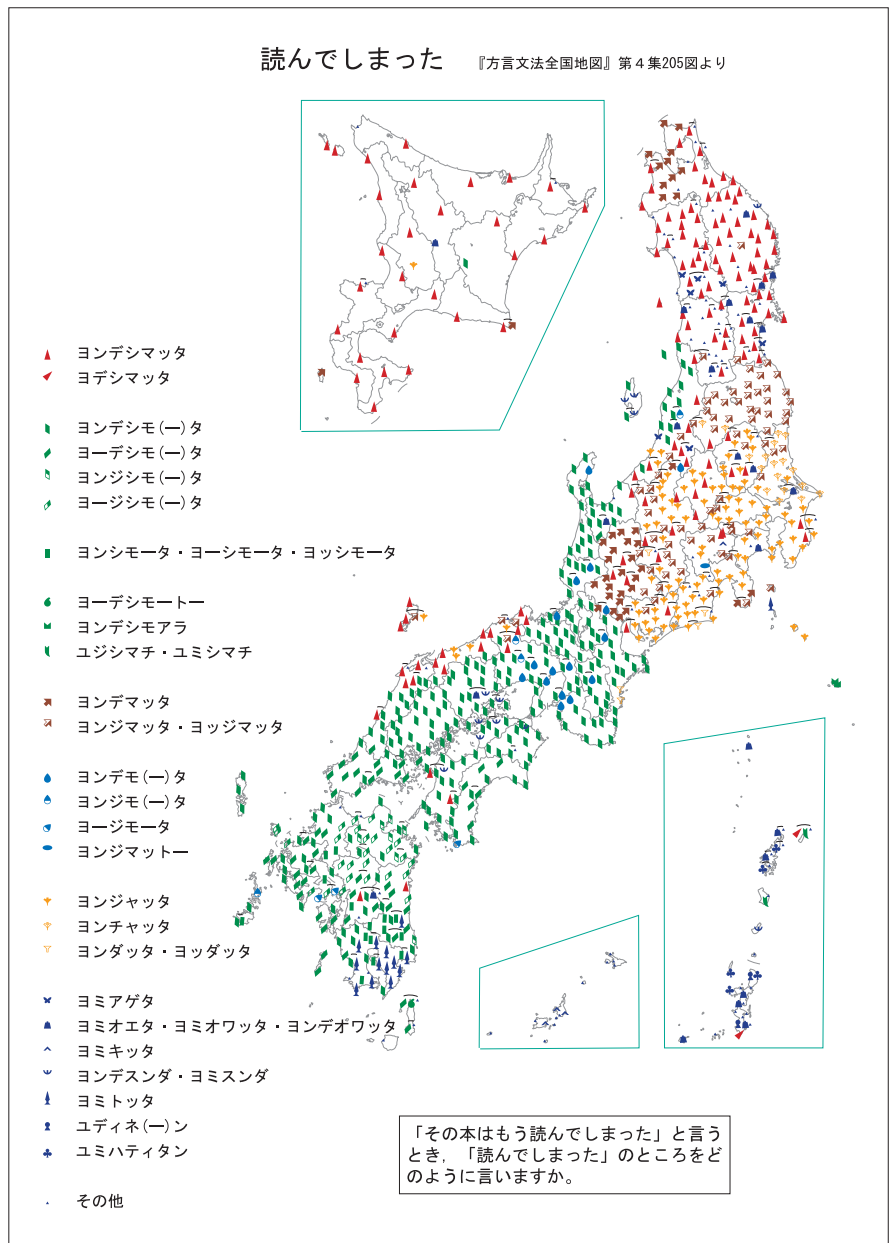
### 地図化の方法

さて、データの整理が済んだら、いよいよ地図の作成です。第4集までは、これを手作業で行っていました。研究室では、独自のハンコを利用して、白地図の上に押印し、紙の原稿地図を作成します。



これを印刷所に渡すと、校正刷りにあたるフィルムが出来上がってきます。このフィルムを原稿地図と照合し、間違いがないか、確認します。照合（校正）は、投射台という巨大なライトボックスの上に原稿地図とフィルムを重ねて行います。以上の原稿地図の作成と校正は、『日本語地図』時代からの技能を身に付けている白沢宏枝さん（元研究所員）が行って来ました。彼女は、おそらく、世界で最も多くの方言地図を作成した人になると思います。

第5集からは、コンピュータによる地図作成が実現しましたが、一方で草稿や一部の原稿地図では手作業の地図も作成しました。コンピュータの場合、入力ミスはそのまま原稿になってしまいます。手作業地図とコンピュータ地図を照合することで、ミスが減らせます。このような複数の目によるチェックは、先に記した採否・統合といった編集作業でも行ってきました。このことで、万全とまでは言えませんが、かなり誤りを少なくすることができたはずで



## 公開データ

調査で報告された各語形、その採否・統合の結果は、比較的簡単な形式のデータに整備して、次のウェブサイトで公開しています。

<http://www.kokken.go.jp/hogen>

公開データでも、かなり細かいレベルで語形が扱えるようになっていました。このことにより、多角的な研究が可能です。いったん、大まかに整理されたデータは、元に戻すのに大きな困難が伴うからです。

## 関わった多くの人々

30年かけて完成した『方言文法全国地図』は、実に多くの方々の協力のたまものです。各地の方言話者の方901名、調査を担当された方93名、編集に携

わった研究者15名、作業を補助いただいた人も相当な数です。研究所内外の様々な方と力を合わせることで、完成に至りました。

編集においては、精密さを心がけたために、並々ならぬ苦勞をかけ、神経をすり減らした方もいらっしゃるかも知れません。おわびするとともに、皆さんに、心より感謝申し上げます。

\*\*\*

この地図集をもとに、すでに多くの研究が生まれてきました。今後、さらにどう活用していくべきか、12月に開催する公開研究発表会（8ページを御覧ください）は、皆さんとともに考える良い機会になると期待しています。

（大西 拓一郎）



## 『世界の言語テスト』

2006年3月／くろしお出版／税込4,725円

近年、地球規模での人々の移動・交流が活発化しているため、いままで以上にコミュニケーション能力の重要性が認識され、言語能力を的確に測定する言語テスト開発の必要性がクローズアップされています。

国立国語研究所では、平成12年度より5年計画で、世界の様々な国や地域で実施されている言語テスト、中でも外国人や移民などの母語話者以外の人々を対象とした言語テストに関して、テストの社会・歴史的背景、種類・内容、作成・実施過程、社会的影響などの観点から調査研究を行い、その研究成果をまとめて、『世界の言語テスト』を刊行しました。

### ■言語テストの発展と現状

科学的な言語能力の測定方法が開発された1960年代初頭、言語は小さな単位に分析することが可能であるとともに、個々の単位が一定の規則に基づいて結びついた構造を持ち、その規則や構造に関する知識を獲得していることが言語能力であるという考えに基づいて、言語テストは作成されていました。それゆえ、発音、語彙、文法等の個別の知識に関するテスト項目によって分析的に言語能力を測定する「個別的要素テスト (Discrete point tests)」が、当時の言語テストの分野では主流でした。

しかし、様々な分野でグローバルな交流が益々活発化してきた結果、単なる教養として外国語を学ぶのではなく、実際にコミュニケーションを行う手段として外国語を習得する重要性が認識されるようになってきました。その結果、言語テストの分野においても、1980年代以降、文法・語彙等についての個別知識よりも実際のコミュニケーション場面の言語活動能力を測定する「コミュニケーション能力テスト (Communicative testing)」の開発に重点が置かれるようになってきました。

『世界の言語テスト』では、このような言語能力観や言語テスト理論の歴史的変遷について解説するとともに、コミュニケーション能力を測定する現代の様々な言語テストを取り上げて紹介しています。

### ■世界各国の言語テスト

近年、ヨーロッパでは欧州統合の流れの中で人々の国境を越えた移動が盛んになり、異なる言語を相

互に理解しコミュニケーションを円滑に行う必要性が生じてきたために、国ごとに個別に実施されていた言語テストを比較・対照するための共通の枠組みを作成することが重要な課題になってきました。

この課題を遂

行するため、1989年に、ヨーロッパ各国の言語テスト機関によって「ヨーロッパ言語テスト協会」(ALTE)が設立されました。現在では、31機関(26言語対象)がALTEに加盟し、ヨーロッパの言語テストの共通枠組み作成を中心とする様々な国際的プロジェクトを実施しています。

『世界の言語テスト』では、ALTEに所属するイギリス、スペイン、ドイツ、オランダの機関の言語テストをはじめ、米国、オーストラリア、日本、韓国、香港で実施されている言語テスト(例えば、TOEFLや日本語能力試験など)の社会・歴史的背景や内容・形式・特色などについても概観しています。

### ■日本の将来と言語テスト

『世界の言語テスト』は、以上のように、言語テストの発展と現状、世界各国の言語テストについて紹介するとともに、「読む、書く、聴く、話す」などの技能を測定する言語テストの作成・実施過程についても具体例を挙げながら解説しています。

少子高齢化社会を迎えつつある日本では、近い将来外国から多数の労働者を受け入れる必要性が生じ、移民に対する日本語教育や言語テストの開発が重要な課題になってくるでしょう。『世界の言語テスト』が、多くの方々に言語テストに関心を持っていただき、今後の日本語教育施策について考えていただくきっかけになれば幸いです。

(杉本 明子)



## 敬語使用と敬語意識の変遷

— 愛知県岡崎市における継続調査から —

「敬語の乱れ」はいつの時代においても言葉の問題のひとつとして意識されています。敬語をどうするかについて議論するためには、「敬語の乱れ」の実際の姿はどのようなものか、それを生み出した原因にはどのようなものがあるのか、などについての科学的データの裏づけが不可欠です。そこで、国立国語研究所では、1953年と1972年に愛知県岡崎市で、敬語使用と敬語意識についての調査を実施しました。2回の調査とも、サンプリングによって選ばれた岡崎市民400人を対象に行いました。また、2回目の調査では、1回目の調査で回答していただいた方々に再度、協力をお願いしました。

いずれの調査においても、敬語使用と敬語に対する意識の実態や推移を明らかにすることが目的です。つまり、方法も内容も同じ調査を定期的に企画・実施して、敬語の使われ方をめぐる変遷を明らかにしていくのです。実際、20年間に起こった敬語の変化と、同じ人が年を重ねることで見られる敬語の変化について、さまざまな角度から分析してきました。

ここで、これまでの岡崎市での調査で明らかになったことを二つ紹介しましょう。まず、話し相手によって、「私」「僕」「あなた」「君」のような人称代名詞を使い分けるべきかどうかについての調査結果から取り上げます。図1に、相手によって人称詞を「使い分けるべきである」と回答した結果をまとめました。

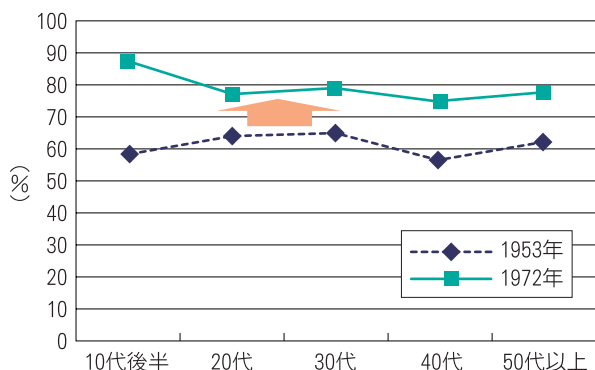


図1 相手によって人称代名詞を「使い分けるべきである」という割合

図1から、1回目の調査結果と比べると、2回目の調査結果の方が「使い分けるべきである」という意見がどの年齢層でも多くなっていることが分かります。

ます。話し相手によって人称代名詞が使い分けられることが望ましいと考える人が増えているということです。

次に、家の中でも、年長の人や目上の人には敬語を使うべきかどうかについての調査結果を取り上げます。例えば、テレビアニメの『サザエさん』で磯野フネさんが夫の波平さんに対して敬語を使いますが、このようなことがどのように意識されるのか、ということです。図2に、「敬語を使うべきである」と回答した結果を示します。

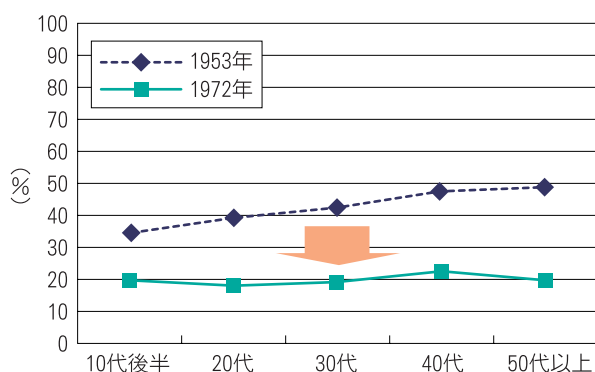


図2 家の中で年長者や目上の人に「敬語を使うべきである」という割合

図2から、家の中でも年長者や目上の人に対して「敬語を使うべきだ」という割合を比べると、どの年齢層でも2回目の方が低くなっていることが読み取れます。逆に言えば、家の中では敬語を使わなくてもいい、という意識が強まっていることになるのです。

このように2回の調査結果を分析すると、岡崎市では、20年間に敬語をめぐる意識に変化が生じていることが分かります。具体的には、年齢にかかわることなく、場面による人称代名詞の使われ方には敏感になっている一方で、家の中では敬語を使う必要性を以前ほど感じなくなっている、ということです。

国立国語研究所では、岡崎市で3回目の敬語使用と敬語意識についての調査を実施する予定です。2回目の調査が実施された1972年から今日に至るまで、社会は大きく変化しています。現在における敬語使用と敬語意識がどのようなものか。また、社会変化との関係の中でどのように変化したのかについて、調査・研究をしていきます。(朝日 祥之)

中国の人が日本語で書いた文章を読んでいると、以下のような「読み手に直接語りかける表現」に出会うことがしばしばあります。

**もちろん、「たばこは万病のもと」ではありませんから（私はそうと思いますけど）、たばこを吸う人にきびしすぎないようにして下さいよ。**

中国語では、例えば新聞の社説のような硬い文章においても、こうした「語りかけ表現」が使われるのは珍しいことではないようです。

一方日本人の書いた文章には、手紙など特定の人に宛てたものを除けば、「語りかけ表現」が現れることはそう多くはありません。先ほどの文章を複数の日本人に添削してもらったところ、末尾部分は多くの人が、例えば「きびしすぎないようにしてほしい」のような、「語りかけ」でない形に訂正していました。文章での「語りかけ」は、できれば避けるべきだと考えている人が多いようです。

しかし、改めて考えてみましょう。日本人が文章で「語りかけ表現」をあまり使わないのは、いったいなぜなのでしょう。自分の意見を訴えていく、という目的の文章であれば、ひとりひとりの読み手に対し直接語りかけるという表現方法も、あっていいのではないかと、その方が、訴えの力は強くなるのではないかと——もし、日本語の学生が面と向かってそのように問うてきたとしたら、あなたならどう答えますか（おや、私も「語りかけ表現」を使っていました）。

この問いに対してはいろんな回答があり得ると思いますが、とりあえず私なら以下のように答えます。「『きびしすぎないようにして下さい』と語りかけることは、読み手を『たばこを吸う人に対し、きびしい考えを持っている人だ』と規定してしまうことに

なる。実際にはいろいろな読み手がいるだろうから、読み手を一方的に規定してしまうような表現は、私としては避けたいと思っている」——。

ですから、文章中の「語りかけ表現」が、常におかしいわけではありません。先ほど私自身も「語りかけ表現」を使いました。文章の読み手に対し、文章読解における何らかの方向性を提示するような「語りかけ」であれば、読み手がどういう人であるかを一方的に規定することにはならないので、あまり強い違和感は出ないのだろうと思われま

す。特定の相手を想定して、その相手に直接語りかける、というやり方は、訴えかけの力は強い一方、想定された語りかけの対象からややずれる人々からは、違和感を持たれたり反発を買ったりする危険性もあります。もちろんその危険性を知った上で、あえてそうした表現法を取る、という選択肢も否定はできません。どういう訴えかけのやり方を取るのがよいか——それは一概に言えることでなく、訴えかけの内容や、実際にどういう読み手が予想できるのか、ということを考え合わせた上で判断すべきことなのでしょう。

われわれは、「ふだん自分は使わない」という表現に出会うと、つい違和感を持ってしまいがちです。場合によってはそれが不快感になってしまうこともあるかもしれません。そのようなとき、「そんな表現はおかしい」と否定してしまう前に、「なぜ自分は、その表現をおかしいと感じるのだろう」「この人は、どうしてこういう表現をしたのだろう」と考えてみることは、非常に重要なことだと思います。違和感の理由を考えてみる、ということは、ことばについて、また人とのよりよい付き合い方について、考えを深めるための絶好の手段になるからです。

（宇佐美 洋）



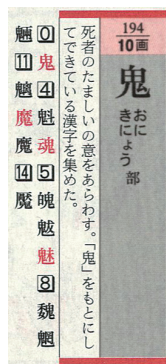
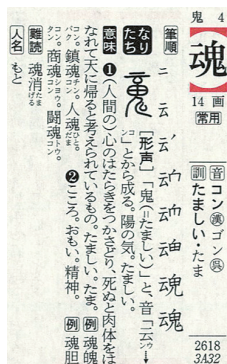
# ことばQ&A



**質問** 「魂」という漢字では「云」が偏ですか。「鬼」が旁ですか。



**回答** 漢和辞典をみてみましょう。「魂」は、「鬼」の部に属します。その部首は、「おに(の)ブ」や「キニョウ(鬼繞)」であるとわかります(図版1)。そもそも部首というのは、漢字を分類する方法のひとつです。直接には、中国清代の「康熙字典」の分類方法を手本にしています。これは、「近い意味や同じ性質を表す、漢字の意味による分類」と言いかえてもよいでしょう。「魂」の字の部首「鬼」は、日本語でのおそろしい「おに」とは限らず、「亡くなった人のたましい」の意味で、それに関係する文字が同じ部首に属しています。一方、偏というのは、漢字の部首のうち、左半分に位置するものをいいます。その時のこりの右半分に位置するものを旁といいます。「魂」の字の部首は偏の位置にはないので、この字に偏と傍の呼び名や考え方はあてはまりません。このように漢字の部首やその分類の様子・理由などを知るには、漢和辞典でその字の所属する部首の解説にも目を通すとよいでしょう。



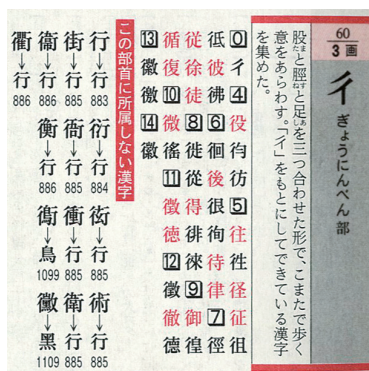
図版1  
「魂」は鬼の部に分類されています

さて、部首以外でも漢字を「六書」で説明することができます。六書は部首分類よりさらにずっと古い後漢時代の『説文解字』に説かれた、漢字の成立事情や構成原則による整理のしかたです。この六書でいうと、漢字の半数以上が形声(ケイセイ)に属します。形声は、意味の集合を表す「意符」と、もともとの中国語での発音や発音によることばのグループを表す「音符」とからなるという考え方です。「魂」の場合は偏(部首のうち左半分に位置するもの)と傍(偏以外の右半分の部分)の構成ではないですが、意符の「鬼」の部分が右にあって、音符の

※この欄は、当研究所に実際に寄せられた「ことば」に関する質問に基づいています。

「云」は左にあります。ですから鬼偏とは言いませんが、意味による分類では「鬼」の部です。「云」は、日本での「魂」の字音「コン」と関連のある音符です。日本語での「魂」という字に、中国での音符「云」やその読みは関連が薄くなっているのです。

以上のように漢字の成り立ちや構成を知るには、漢和辞典の「解字(漢字のなりたち)」の欄を読めばよいですが、大方の漢和辞典に共通するものと、漢和辞典ごとに独特の考え方を載せるものがあります。疑問になった漢字については、できれば複数の漢和辞典の記述を見比べてみてください。また部首分類は上のように中国に手本がありますが、日本での漢和辞典で使いやすいように分類を変えることもあります。辞書によっては、ある部首に所属する漢字の種類的一致しない場合もあります。しかし、この部首に属する漢字、とか、別の部首に譲っている漢字、といった注記を加えているものもあります(図版2)。



図版2  
「彳」(ぎょうにんべん)と「行」(ぎょうがまえ)は別の部首に属しています

漢字学習では、部首といえば偏(左半分にあるもの)で、冠(上に位置するもの)や繞(左上から時計と反対周りに下に半周するもの)もある、とはっきりした字形の特徴によって、漢字を整理して覚えるための分類が部首だ、と考える人も多いのです。じつはこれは、学習や記憶、あるいは字形をとらえるため、その時々本来の部首分類の一部を活用しているのです。部首分類の本来の意味やその中での全体の漢字の配置、分類の重複や改変など知らないまま漢和辞典を使っていることも多いでしょう。一度ゆっくり漢和辞典を読み比べてみてください。

(山田 貞雄)

\* 図版は『例解新漢和辞典 第3版』(2006, 三省堂)による。



## 国立国語研究所公開研究発表会 「方言文法の全国分布と全国方言調査の将来像」

日時：2006年12月16日（土） 14：00～17：30

会場：国立国語研究所 講堂・多目的室（2階）

内容：今春完成した『方言文法全国地図』全6巻（地図350枚）は、方言文法の全国分布を提示する地図集です。この資料をいかに活用すべきか、また、研究所として全国方言調査を今後どのように展開していくか、シンポジウムとポスター発表を通して、考えたいと思います。

【プログラム】 シンポジウムに続けてポスター発表を行います。いずれも題目は変更の可能性あります。

### 1. シンポジウム 〈パネル発表とディスカッション〉（発表順）

佐藤 亮一（国立国語研究所・名誉所員）……『方言文法全国地図』作成の経緯と意義  
—— 立ち上げから完成まで ——

日高 水穂（秋田大学教育文化学部）……『方言文法全国地図』に基づく文化の事例

中井 精一（富山大学人文学部）……地域研究からみた『方言文法全国地図』の評価と  
今後の課題

大西拓一郎（国立国語研究所）……方言分布の解明に向けて

### 2. ポスター発表（発表者50音順）

井上 文子（国立国語研究所）……間投助詞の全国分布と方言談話資料

大西拓一郎（国立国語研究所）……地理情報としての方言情報

小西いずみ（東京都立大学）……『方言文法全国地図』にみる用言の形態論的変化  
の方向性

沢木 幹栄（信州大学人文学部）……方言文法全国地図資料のデータベース化

三井はるみ（国立国語研究所）……共通語コードの全国調査に現れた方言の影響

鍵水 兼貴（国立国語研究所）……『方言文法全国地図』における共通語化の状況  
—— 多変量解析を用いた分析 ——

吉田 雅子（国立国語研究所）……『口語法分布図』と『方言文法全国地図』

※その他、一般向けの概説ポスターも展示します。

### ◇問い合わせ先

042-540-4300（国立国語研究所代表）

### ◇参加費、申し込みは不要です。

### ◇交通案内

〒190-8561 東京都立川市緑町3591-2

- ・多摩モノレール「高松駅」下車 徒歩5分
- ・立川バスで立川駅北口2番のりばより  
「自治大学校・国立国語研究所」下車 徒歩2分
- ・立川駅より徒歩20分



## 新 刊

### 『世界の言語テスト』

2006年3月／くろしお出版／A5判横組み363ページ／税込4,725円

（4ページに紹介記事があります）

### 『日本語科学』20

2006年10月／国書刊行会／B5判横組み122ページ／税込3,150円

